

第9回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 平成30年10月23日（18：30～19：40）

開催場所： むつ市役所 大会議室A

出席者： 宮下 宗一郎 市長
氏家 剛 教育長
宮浦 雅子 教育委員
村中 一文 教育委員
納谷 順子 教育委員
田中 志昌 教育委員

事務局	教育委員会	松谷	教育部長
		木下	政策推進監（総務課長）
		和田	副理事（学校教育課長）
		畑中	総務課総括主幹
		吉田	生涯学習課長
		中居	学校教育課総括主幹
		工藤	中央公民館長
		鷲岳	川内公民館長
		佐藤	大畑公民館長
		三上	脇野沢公民館長
		桜井	図書館長
		柏谷	総務課主幹
		加藤	生涯学習課総括主幹
		石川	学校教育課主任指導主事
川下	学校教育課指導主事		
市長部局	中里	民生部長	
	坂野	民生部政策推進監（市民課長）	
	中村	民生部市民スポーツ課長	

1. 議事

事務局： ただ今から、第9回むつ市総合教育会議を開催いたします。

本会議は、むつ市総合教育会議設置要綱第4条第3項の規定により、市長に議長を務めていただきます。

市長、よろしくお願いいたします。

宮下市長： それでは、規定に従いまして議長を務めさせていただきます。本年度初めての会議となりますし、新教育長制度移行後初めてということになります。皆様には忌憚のないご意見をいただきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

本日は『「むつ市教育大綱」における主な施策の中間報告について』を議題としております。はじめに、資料について、事務局からの説明を求めます。

事務局： 本日の資料についてであります。本日は限られた時間で議論を中心とした会議になるよう、資料は事前に配布させていただきましたので、説明につきましては、4点の重点目標から主要事業について1つずつ絞ってご説明させていただきますことをご了承くださいますようお願いいたします。資料の方ですが、赤枠の部分が説明部分になりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、1つ目の「全国学力学習状況調査」について担当よりご説明いたします。

事務局（川下指導主事）： 学校教育課の川下です。

「全国学力・学習状況調査」の結果について説明させていただきます。

小学校6年生については、全国に対して、国語Aが+3.3ポイント、国語Bが+1.3ポイント、算数Aと算数Bはともに+0.5ポイ

ント、理科が-0.3ポイントなど、理科を除く4調査項目において全国平均を上回りましたが、目標値を達成したのは国語Aのみという結果です。

中学校3年生については、国語Aが-0.1ポイント、国語Bが-1.2ポイント、数学Aが+0.9ポイント、数学Bが-1.9ポイント、理科が+0.9ポイントとなり、2調査項目において全国平均を上回りましたが、目標値を達成した教科はありません。

こういった状況ではあります。各学校では児童生徒の学力の実態を把握した上で、これまで以上に組織的・計画的に学力向上に取り組んでおります。

具体には、「県平均3ポイントアップ」や「学力向上率 前年比2%アップ」といった学校独自の目標値を掲げて取り組む学校や、むつ市の課題である「学力の二極化」の解消に向け、基礎・基本の定着に加え、学んだことをどのように生かすのかといった「活用力の育成」を含め、少人数指導、習熟度別指導、ティームティーチングといった指導形態を工夫する学校が増えてきております。

さらに、市内の多くの学校では、朝や放課後に補充学習を実施しておりますし、家庭学習の習慣形成に向け問題集に取り組みせたり、週末課題を与えたりする学校もあります。

今後の教育委員会の取組としては、次の4点を考えております。

1つ目は、秋の学校訪問を通して、次期学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」といった授業改善の視点で指導助言を行うとともに、教育委員会と学校が同じ方向性で、組織的に取り組むことを目的に作成した「むつ市小・中学生学力向上の構造図」について確認し、各校のより一層の取組をお願いする予定です。

2つ目として、12月に新規事業として実施する「活用力育成講座」では、学力向上に向け効果をあげている取組の紹介や、今年度予算化

していただき参加可能となった全国規模の研修会に参加する指導主事による、各教科指導の先進的な取組について情報提供を行います。

3つ目として、学校教育課で作成している活用型問題集に新聞記事を取り入れるなどして、ポイントとなる情報を読み取ったり、学んだことを活用して論理的に考えるなど、いわゆる読解力や思考力・判断力・表現力等の育成に向けた教材づくりに取り組みます。

4つ目として、今年度の新規事業であるキャリア教育講演会等を通して、子どもたちが夢や希望を抱いたり、自己肯定感を高めたりする機会を設定していきたいと考えております。

以上、むつ市の「学力向上策」が形として表れるまで時間はかかるものと思いますが、学力向上に向け取り組んで参りたいと考えております。

宮下市長： はい、ありがとうございました。

4つ説明を受けるということですが、ちょっと説明がそれぞれやると長くなると思いますので、1つずつ皆さんからご意見をお伺いしたいと思います。まず、今の説明に対してそれぞれからお伺いしたいと思います。

まず宮浦委員をお願いします。

宮浦委員： はい。この学力に対しては、先日学校訪問で第二田名部小学校に行かせていただきまして、直接じっくりと授業の様子を見させていただきました。本当に、子どもも先生もみなさん頑張っているなあと感じました。

宮下市長： 何年生ですか。

宮浦委員： 1年生から6年生までしっかりと午前中いっぱいかけて見学しました。授業の「主体的・対話的で深い学び」というのは1年生から頑張っているなあと印象を受けました。子どもに「どうしてそういう風になるのか」という考えを丁寧に聞いて、子どももそれにこたえよう

と一生懸命言葉で返すという授業の風景を見せていただいて、これがどんどん力になっていくんだなあと思いました。6年生まで見ていったんですが、6年生は本当に立派でした。何年か前の授業風景とは違ったものを見させていただきました。本当に努力されていて、学力テストの結果を見るとそれが成果に出ていて、嬉しいことだなと思っています。

宮下市長： はい、ありがとうございます。それでは次に村中委員をお願いします。

村中委員： この方針については特に意見はなくて、これでいいんだと思います。ちょっとどうなのかと思うところは、通常の小中分かれてる場合と小中一貫の学校があるわけですが、それらがこれにどういう風に反映されているのか気になったんですが、どうなんでしょうか。

宮下市長： はい、事務局をお願いします。

事務局（和田学校教育課長）： 小中一貫の施設一体型と校舎が離れている施設分離型についてですか。

村中委員： 小中一貫でやっている場合と離れている場合とでこれにどう反映されているか、ということですか。

宮下市長： 現状はまず小中一貫教育は全部小中一貫でやっているということになっています。併設型か併設じゃないかの違いです。脇野沢、川内は併設型でやってますので、そういう場合か二田小と田名部中かという場合の違いについてはどうなっているかということについてお願いします。

事務局（和田学校教育課長）： 学力面では特に優位差は認められていません。

村中委員： わかりました。

宮下市長： 今のは点数という意味ですか。

事務局（和田学校教育課長）： はい、そうです。

宮下市長： はい、わかりました。

次に田中委員をお願いします。

田中委員： 教育現場では、非常に組織立って、うまく回っているんだろうな、と思っています。実際に私は現場には行っていませんので、その辺のところは話をうかがっている範囲になるのですが。

この中で、家庭教育の方、つまり学校ではかなり組織立って出来ているんですが、家庭教育の中での位置づけというのは、組織としては離れているんでしょうが、そういうものに対する評価というものは、点数以外では無いわけですから、例えばご家庭を訪問されたりして実際にそういうことを実際に家庭で伺ったりするとか、あるいは親御さんとの面談の中で、改善すべきものとか、そういうものはこの（計画）中に入れない方がいいのでしょうか。

それとも、それも含めて計画を立てた方がいいのか、どうでしょうか。

宮下市長： はい、事務局をお願いします。

事務局（和田学校教育課長）： 学力向上に関して家庭の協力は絶対に欠かせないものだと考えております。ですので、学校現場では定期的に子どもの学習状況等については保護者に情報提供をしております。また、子どもの進路を含めキャリア教育に係る部分ですが、保護者との連携、協力は欠かせないものだと考えております。

宮下市長： はい、納谷委員をお願いします。

納谷委員： はい、いつも結果を見て気になるんですが、記述式の問題がなかなか上がってこないというところなんです。いつも出てくるんですけども、さきほど田中委員がおっしゃった家庭教育は私もちょっと胸が痛いのですが。

子どもたちと接していていつも感じているのは、今 SNS とかで友達や親と連絡を取り合うときに、親はわりと長い文章を打って送るんですが、子どもたちは一言二言しか打たないで返信してきて、親が打つ文章は長すぎる、ということで怒られるんですが、やっぱり長い文章を書くことが、今の子どもたちの生活の中では少ない気がします。紙ではなくて、全部電子的なもので見てしまうとか、辞書を引くよりも、検索して物事を調べてしまうということがあると思います。

検索するとそのもの（言葉）しか出てきませんが、辞書を引くと前後の他の言葉もあったりして、調べたいもの以外のものを確認できるというのが辞書のいいところですが、ネットの検索とかだとそこしか出てこないのも、語彙力とかも、大切だと言われていますが、家庭でももちろんそうですし、学校の方でも、いっぱい文章を書いたり、読んだりということをもう少し教育の中に取り入れてもらえれば、こういった問題も少し良くなっていくのかなぁと思います。

宮下市長： はい、和田課長をお願いします。

事務局（和田学校教育課長）： 今の学習指導要領においては、各教科で言語能力を育成することが柱になっておりますので、読んだり伝えたりする力の育成を今後も進めていきたいと考えております。

宮下市長： はい。教育長の話聞く前に、私からなんですけれども、今回の学力テストの結果については、私は大変強い不満を持っています。目標値を達成できなかったということについて、果して学校現場がどのようなとらえ方をしてい

るのか、ということがどの学校からも私自身のところに、総合教育会議をやっているにも関わらず、なんら報告がないです。それについて、例えば教育委員会としてこれにどう取り組むかということは部長から今の説明で聞くことはできますけれども、はたしてそれを学校現場がどうとらえて、実際やっていく道筋が見えているのかどうか、私には理解できない。ですから、目標値を達成できなかったことの責任はどこにあるのかということが不明確になっているんです。教育委員会にあるんですか、学校にあるんですか、というところの答えは求めませんが、そういう部分があると私は思っています。結果として新規事業として4点やっていますというような話がありましたが、はたして4点をやったからその学力が向上するのかということも、原因の追究ができていないのかわからないので何とも言えない。もう1つは先ほどの説明のなかで、時間がかかりますよということですが、じゃあどれくらいかかりますか。大変厳しい言い方をしますけれど、いったい何年かけて県平均を上回るような子どもたちにするんですか、というところが見えない。子どもたちはこの一瞬一瞬がすごく大事なので、何年後かにできますという話をしてしまうと今の子どもたちは捨てられるんですか、ということをお我々は真剣に考えなければならないと思っています。私の理想は、地域の格差がない社会を作りたい。それは全国や東京にいるような子どもたちと同じ環境で学べるようなもの、それはほとんど無理だと思いますが、それにチャレンジしなければならない。それがむつ市でも受けられるような環境をどうやって作るか、トップの子どもたちも含めて、押し上げる仕組みをどうやって作るのか。そうやって地域間の格差を無くすのと同時に今度は学校間の格差もあると思う。それはどうなんですか、と。さらに言えばクラスの格差をどう無くすかということも大事。あの先生だったらよかったけど、今年ちょっと先生変わったら全然勉強しなくなったということはよくあ

ることだと思います。もう一つ、最後は家庭にも責任はありますけれども、家庭環境すら超えるということが理想で、それができれば学力の問題というのはおそらくだいぶ良くなってくる。そういうことをできるようなかたちにするために、今回の学力テストの結果が目標に達しなかったことについて、いったい誰がどんな責任があるのか。別にこれで教育長やめてくださいとかそういう話ではなくて。次、施策を作っていくにあたってどういう風に考えていけばいいのかということをお大なる反省がないとなかなか前に進まないんじゃないかな、と思います。

今回ですね、前回の総合教育会議からの違いということ、教育委員会事務局にやってもらって「まさかり高校」というのを始めたんです。田名部高校中心になると思うんですけども、やっぱり医学部に行く子と東大に行く子をこの地域からも育てようという明確な目標のもとにスタートしました。おそらく結果はちょっとは出るかもしれませんが。来年結果が出てもまぐれで、再来年結果が出てもまぐれで、3年ぐらいやってやっとなんか。そこに持っていくために、中学校と小学校をどうするかという議論、幼稚園からどうするかという議論をこれからしていかなければならないと思うんですけども、そういう部分をよくよく考えていくと、やっぱり結果の分析ということをやっているとは思いますが、やっているといる部分もあるんですけど、やっていかないと、本当にこのままいっちゃうなあという感じがすごくします。平均なので、実はすごい上の子もいたり下の子もいたりするということもあるのかもしれませんが、その辺をどうとらえるかというのはよく考えていかなければならないなと思います。とりあえず、それぐらいにしておきますけれども、そこはお願いします。

教育長お願いします。

氏家教育長： 市長がこれほど話した後で話をするのも気がひけるところもありますが、市長が先

ほどこの「全国平均3ポイント上回る」というのはいつを目標にしているんだということですが、この紙に書かれているように、平成33年为目标ということなので、それが最終的な目標になるかと思いますが、いずれにしてもこれは早く達成すべきだという風な認識は当然あります。そういう中で今この小6、中3の結果を見ますと確かに全国平均の3ポイントを上回っているのは小6の国語Aのみということでありますけれども、実際に数字で比較しますと、ある意味僅差というとらえ方もできるのかと思っております。そういう意味ではもうひと頑張りという風なところで少しずつ全国平均を上回るというかたちになっていくのかなと期待をしているところであります。そうした上で、やはり学校現場を見ますと、この学力の向上というところだけを切り取って議論しているわけですが、やっぱり学校現場には常日頃さまざまな問題が日々発生していて、それがいいことならいいですが、そうではない。先生方に相当精神的・肉体的に負担になるようなそういう様々な事案が発生していて、それを先生方は解決しつつこういう風なものに取り組んでいるという現状にあるんだと思います。

学校訪問等で見ましても、先生方は本当に親身になって、子どもたちに向き合っている姿を見て、はっきり言って感心しました。すばらしいな、と。さらに申し上げれば、この学力の向上と直接結びつくかわかりませんが、このむつ地区の正教員の数が他地区に比べて比率として低いという現状があります。その足りない部分は当然臨時の先生で補っているという状況です。こういう風な問題もこの背景にはあるんじゃないかと思っておりますので、まずは正教員のきちんとした配置、理想ですが100%ということになれば今以上の効果が期待できるのではないかと思います。

宮下市長： まさにその通りだと思います。先生方が何もしていないとも思わないし、いろんな問

題があって日常につぶされて、この問題に傾注できないというのは、それはその通りだと思うし、またそういうのが増えてきているんだろうというのは、親との関係も含めてよくわかるんですが、そうだとすると、我々は重点分野を定めてKPIを作って、これをやりましょって決めました。キャリア教育、ジオパーク、いっぱいやらせています。教育大綱において、いっぱいやらせてもらっています。これ以外に健康教育もやれということで学校の時間がどんどんつぶされて、という現状なのに学力だけは上げろと言っているの、要するに、矛盾していないかという話があります。先生たちはそれ以上に、子どもたちの日々のケアが大事で、問題のある生徒もたくさんいるでしょうし、そういう部分でいくと心苦しいんですが、ただ、そうじゃなくて、そういう日常をどうやって越えていくかという議論をしていかないといけないんです。そうしないとこの問題はいつまでたっても、そうは言いますがけれどもこういう現実見てくださいよ、市長ということで、実際学校に行くと、これは先生大変ですね、という話で終わってしまいます。

大事なことは何かということをおさん去年まで議論していて、やっぱりこの地域学力低いよねということです。要は、この全国平均というのはしよせん公立校の全国平均ですから、東京の私立入ってませんから。そういう中でも平均が達しないのか、あるいは県平均なんかと比べても低いところがある。これでは地域の将来はなかなか開けない部分があるのではないかと、という話になって、前はいったんは小中一貫ということでぐっと上がった時期があるけど、たぶんこの先踊り場になるだろう、もしくは下がるだろうという予測があって、じゃあもう一度そのへん考え直さないといけないなと言っているんです。だから日常を取り出して、それがあからできないということじゃなくて、だとしてたら日常をどう変えてこの問題を傾注していくかということを考えていかなければならないと

私は本当にそう思います。だから変な話、中学校だって部活やらせすぎですよ。いっぱい優勝旗持ってきますけど、彼らにとってそれが本当に必要なことか、と。ちゃんとそういうことを指摘できる大人がいないといけないんです。昔から中学校は部活が義務になっていて、部活がないと生活指導もできなくなるというのは、ずっとそう言われていますけれども、それって本当ですか。そういうところから考えていかないと勉強に向いていかないんじゃないかということすら議論していかないといけない。それぐらいこの地域の教育、学力が危機的な状況だと私はずっと指摘している。ここを考えてほしいんですけれど、和田先生一言お願いします。

事務局（和田学校教育課長）： 先生方が授業に集中できる、傾注できる環境作りをいかにするかということが今後議論の中心になってくると思います。

宮下市長： そういう部分でいくと、どういう課題があるんですか。今どういうことをしてあげればいいのか。でも、それだって、教育委員会のマンパワーは限られていますし、全部が全部引き受けられるわけではないじゃないですか。

事務局（和田学校教育課長）： 本来先生がやるべき仕事は授業であると思いますが、それ以外の部分もかなり先生方が背負っているのが、今の日本の教育システムだと思っています。ですから、そこをいかに、地域や保護者と一緒にやっていけるか、そこを探ることが我々の向かうべき方向性ではないかなと思っています。

宮下市長： たとえば、部活とか地域活動とか。いずれにしてもこの問題については、私自身は地域を変える根幹になると思っていますし、いろいろな予算の話とか、施策の話とかありますけれども、最優先課題として今後も取り組んでいきたいと思っていますので、これから31年度の子

算とかそういう話になりますが、思い切った提案を考えていただいて、先生方が前向きに取り組めるような環境を作っていただきたいと本当に心からそう思っていますので、ぜひよろしくお願いいたします。やっぱり誰かがちゃんとやらなきゃいけないんです。

次、行っていいですか。誰か発言ありますか。

村中委員： 前回の教育会議でも話したんですが、平均点を上げるためにどこの層を上げるのか、力を入れるのかという話ですよ。どんどん先に進む子もいれば、中間もいれば、いつまでもついてこれない子もいるわけですよ。全体を上げるんだったら、それぞれに全部力を注げばいいでしょうけど、そうはいかないわけです。先生が1人であるいは2人で1つの教室を見ている場合というのは、平均点を上げることが本当に最終目標になるのか、それとも極力、下位層を作らないのが大事なのか、それともトップクラスが、むつ市のトップクラスは県でも全日本クラスでもトップクラスになれるんだとそういう教育をしたいのか。そのあたりの、どういう目標でやりたいのかを考えないと首尾一貫したことができないんじゃないかと。もし、本当に平均点を上げるんだったら、能力別クラスを作ればいいんですよ。できる子はできるような勉強をさせる。中間は中間。下位層の子どもたちは下位層の子どもたちなりにいかにしてついていくかということをやれば間違いなく平均点は上がるはずですよ。ただ、システム上、それはなかなかできないんだろうと思いますけれども、結局それぞれの層にどういう力を分配していくのかということを考えていかないとだめなんじゃないかと。

今市長が言ったまさか高校の学校はトップクラスの人間をいかに引っ張りあげるかということですよ。だから高校だったらそういうことはできるとは思うんですけど、小中はなかなか難しいと思う。もし、本気で将来に結び付けたいなら小中でも、そういう子どもたちを何ら

かの形で引っ張りあげていくと、子どもの頃から引っ張り上げていくことも考えていけないといけないのかなと思いました。

宮下市長： 私も今村中委員が言っていたことに大賛成で、これは教育委員会のメンバーは言いづらいと思うんですけども、やっぱりまずはトップを引っ張っていくことをやらないといけないと思うんです。そこにどうやって力を注ぐかという、学校現場としては全体の平均を上げる、みんなをケアしないといけないという部分があると思うので、能力別といっても先生の数が足りなければできないという部分もあると思いますし、マンパワーでやれることは限られているので。

かつ、優先順位が必要だと思っているので、学校現場はやはり、平均的な子に合わせて進めるか、平均の低い子にボトムアップするという方向性に行くと思うんですけども、逆にまさか高校みたいに、市長部局の主導でそういうことをやるか、新しい仕組みが絶対必要だと思うんです。そういうことをやって、成果が出るまで時間がかかるというのであれば、わかるんですけど、学校の枠組みだけにとらわれて、やっているとちょっと限界がある気がするんです。そういう部分での思い切った提案をする、と。夏休みは能力別に、講師を呼んでやるのに金がかかったとしても、それでやるんだと。みっちり1か月間や10日間やるから、勉強する子だけでも来いと。外から講師呼んでやりますというのでもいいと思う。それに何百万もかかるんだったら、むつ市もお金ないですけど、頑張ってみようという話になるかもしれないし。やっぱり村中委員が言ったような話を検討してほしいんですよ。

「優良事例紹介しました」と本当に聞いている先生がいるのか、それを先生がやってくれるのか、ということだけに頼るのではなく、そういうものを作ってほしいと思うんですけど、和田先生どうですか。

事務局（和田学校教育課長）： 学校現場にいる人間として、やはりどの子にも勉強の楽しさを味わわせてあげたいと思う気持ち、それがないと学校は意味がないと思うんですよ。存在意義がなくなってしまう。特に義務教育ですので。義務教育としての役割を果たしたいというのが我々教員の思いです。

宮下市長： だからこう、どこに注目して学力を上げるかということすら言いづらい環境にあるということですよ。僕はやっぱり、「言える私たち」、先生じゃない企画部局がそういう企画をする。そういう相互作用の中でこうやっていくということが必要なんですけど、ただそこも教育委員会が学校を使ってやったりとか、まさにジュニア大使もそうですよ。あれは教育委員会でやってますけど、ある意味トップ育成じゃないですか。何人かしか行けない、学校から選ばれた子が行って、文化を学んで来て、広めている部分もあるし、個人の将来に役立っている部分というのもあるわけで。それと同じことがなぜ普通の学習でできないのか、ということです。本来やるべきですよ。

それはスポーツでもそうだと思うんですけど。マンパワーとお金の話は別の文脈で解決できるかもしれないけれども、ぜひそういうことは考えていけないと思います。部長、よろしくお願いします。

事務局（松谷部長）： はい、わかりました。

宮下市長： ということで、次いきますか。

事務局： それでは続きまして、資料の方は5ページになります。「体育・健康教育の充実」の中の「小学校部活動のスポーツ少年団への移行」についてとなります。

事務局（中居総括主幹）： 学校教育課の中居です。

小学校部活動からスポーツ少年団等への移行について説明させていただきます。

小学生の望ましいスポーツ活動の環境づくりを進めるために、私たちは事務局として、スポーツ少年団等への移行に向け支援しております。現在、移行済みの小学校が5校、一部が移行し他の部活動でも進めている小学校が3校、現在検討中の小学校が3校、児童数減少により、数年前から部活動がなくなっている小学校が2校となっております。

現在検討中の3校のうち、川内小学校では6月に各部活動の保護者の代表が話し合った結果、9月に運営者の組織づくりを始め、その上で指導者を探していくなど移行に向け取り組んでおります。

奥内小学校と関根小学校では、児童数の減少により、数年前から野球部やミニバス部等を統合した総合的な運動部として、いろいろな運動に親しみながら、陸上競技やミニバスケットボールの5on5など、参加可能な大会に出場しております。スポーツ少年団への移行を検討しておりますが、移行しても、全校の児童数がさらに減少していく可能性が高いことや、地域の実情から指導者を探すことが難しいといった実態を抱えており、当面は総合的な運動部としての活動が継続するものと思います。

移行した学校では、例えば大畑小学校では、スポーツ少年団の代表者会議を開き、施設の管理や、練習開始時刻までの児童の居場所づくりなどの連携を図っています。

また、保護者からはスポーツ少年団を優先して学校施設を使わせてほしいとの要望がありましたが、学校開放も含めた学校施設の使用は、各学校長の判断であることを小学生スポーツ活動連絡協議会でも確認しております。そして、実際に各学校ではそのような配慮をしているようです。

なお、移行した学校や一部移行している学校から、体育館の鍵やグラウンド整備に関する要望が寄せられており、その際は、事務局が連絡・

調整を進め、教育委員会総務課が対応しました。

今後の支援についてですが、現在、移行を検討している学校には、これまで部活動として学校が蓄積してきたノウハウや資料を積極的に提供することにより、保護者等が運営組織を作りやすいよう支援します。また、移行済みの学校がこれまでに抱えた課題や解決に役立った情報を整理し、提供することも考えております。

その上で、学校や保護者から寄せられた要望としては、指導者の確保が最も多く、次に施設・設備の維持・管理、移行に伴う物品の補助、スポーツ安全保険の補助、移動手段の補助(バス)などとなっております。

これらの要望につきまして、スポーツ活動連絡協議会では、施設・設備の維持・管理は学校教育の充実や安全に関わることでもありますので、これまで通り支援する必要があること、児童のスポーツ安全保険につきましては支援を検討すること、移動手段や物品の補助につきましては基本的に受益者負担であり支援は好ましくないのではないか、という意見が出されました。これらの意見を参考にしながら今後検討を重ねていきたいと思っております。以上です。

宮下市長： はい、ありがとうございました。こちらの方も皆様から一言ずつお願いしたいと思います。宮浦委員お願いします。

宮浦委員： はい、このスポーツ少年団もだいぶ定着してきていて、子どもたちがスポーツするのも親の責任で、なんとか頑張っているということで、送迎とかそういういろんなことが難しい人たちはどうしているのかなあと案ずるところではありますが、なんとかやっているのかな、と。部活で先生たちを遅くまで拘束することもなく、いいことだなと思っております。

案じるのは指導の面で、ご近所の父兄とかスポーツ経験者たちが一生懸命やっていますが、子どもの扱いや指導など、技術以外の、子どもの動かし方などはどうなっているのかな、と。

実際に見たわけではないのですが、懸念したりしています。いろいろと今回の対策で示されているようなので期待しています。

宮下市長： 指導者については、これからどういうかたちで養成していくのか、現状どうなのかということを事務局から説明できますか。

事務局（中居総括主幹）： 市民スポーツ課で指導者バンクの方を進めておりますが、実際に学校の要望する指導者とマッチングするのかどうかについては課題がありまして、各学校や保護者を中心としながらも、いろいろな情報を集めながら進めているところです。例えば第二田名部小学校では、春は部活動として行っていた男子のミニバスケットボール部が、そのようにしてスポーツ少年団に移行し、さらに野球部も移行を進めているそうです。そのようにして進んでいるのが現状です。

宮下市長： 市民スポーツ課から補足はありますか。

市民スポーツ課（中里部長）： 指導者バンクというお話が出ましたが、私も年度内にこれを完成するように進めております。しかしながら長期にわたった学校への指導というのはかなり厳しいものがあるということから、例えば学校で指導する父兄の方々に技術を協会の方から指導するという風なかたちも一つ考えて今進めているところであります。

宮浦委員： はい、ありがとうございます。

宮下市長： 村中委員お願いします。

村中委員： 質問ですけれども、将来的にはどんどんスポーツ少年団に移行していったら、学校のクラブ活動はほぼ全部スポーツ少年団に行くという理解でよろしいですか。

宮下市長： はい、そうです。

村中委員： そうした場合にはどうなのでしょう。やっぱり学校でやっているような形とかなり共通した格好になるのか、それともかなりスポーツ少年団の形として独自のパターンになっていくのでしょうか。

宮下市長： 地域として、独自のパターンというのを目指しています。

村中委員： そうするとたとえば、野球部とかがそうなった場合、今後はいろんな大会には学校単位ではなく、スポーツ少年団単位で参加することになるのでしょうか。

宮下市長： 今現状、もうスポーツ少年団単位で出ている場面もありますけれども、今後は学校単位というよりはスポーツ少年団単位で大会に出るとというのが原則になってきます。そもそも部活廃止しますから。

村中委員： 私は前回の総合教育会議でも、シーズン制の話をしたんですけど、自由度がどのくらいあるのかなあと。例えば子どもによっては冬はスキーとかをやって夏は球技、野球、サッカーなどそういうのをやって、と。そういう風なことを考えている子どもがいた場合に、自由度がどうなのか、と。ものによっては年間を通して、やらないような子どもはやらないという話になるんじゃないかと、そういう話はどうかのかなあと。

宮下市長： 理想としては、それぞれのスポーツ少年団としての考えはあるとしても、子どもたちが入るかどうかの選択があるのと、入ってから夏はそれだけやる、冬はスキーをやるという選択も当然あると思いますし、今そのスポーツ少年団自体の形がまだ見えていない部分もありますので、村中委員のご指摘のよ

うな、子どもたちの選択、あるいは親の選択によってさまざまなスポーツする機会を提供するかたちになっていただきたいと思います。

村中委員： 私も、現実に来上がったものを見てから考えないといけない部分は結構あるのかなとは思っていました。

宮下市長： 田中委員お願いします。

田中委員： 移行済み5校、一部移行3校とありますけれども、1つ気になるのが、例えば今までその学校で部活をやった子が10人いました、と。で、スポーツ少年団になったらそのうちの例えば3人がリタイヤをして7人が移行しました、と。そういう数字が実は移行するまではわからないんですけれども、移行が始まると、結局あきらめてしまう子もいるのではないかと。部活入っていた子が全員スポーツ少年団に行っていないかもしれないという心配があります。あくまでもスポーツですから、みんな強くなりたいんですけど、全員が強いはずはないので、その中には好きだからとかいろんな理由でそのスポーツを楽しんでいる子もいるので、その中で競争するだけの組織に入れないうち出てきそうな気がするんですよ。それが昔の部活の中で、友達と一緒にやって楽しい部分も、補欠だけ頑張る子がいたと思うんですけど、こうなってしまうと結局補欠の子がいなくなってしまうような気がするんです。それはわかりません。実際の数字の中にどの程度移行してくれたかがそのうちに出てくるのかなと思ってたんですけど、そういうのを出す予定はありますか。

宮下市長： まずですね。私がちょっとその点について申し上げたいのは、実は今もうスポーツ少年団という形でやっている、例えばサッカ

一のむつFC。この子たちがどのようにサッカーしているかという、彼ら非常に強いんですけど。県内でも優勝したりとか、全国大会にも行くような子達なんですけど。自分もラインメールの時にサッカーやることになったんで、練習に2日間行ってみたんですけど、そういう強いチームでスポ少という、イメージとしては競争過多になって、強い子しかやってないというのがあるかもしれませんが、決してそういうことではなくて、みんなで和気あいあいとサッカーやって、行きも帰りも談笑しながら。もうちょっと規律があった方がいいなかと若干思ったんですけど、楽しくやっているというイメージです。そうじゃないスポ少もできるかもしれませんが、必ずしもスポ少だからと言って競争至上主義になって、ただ単に運動ができればいいやっという子どもたちが取り残されてかっていうと決してそうではない。そこはやり方次第なので我々移行するにあたっては、ケアできる部分はしなければならぬと思います。原則はスポ少自身はおそらく、子どもをたくさん集めないと組織として成り立たないので、必ずそういうところは考えるようになってくれると思っています。私は信じています。そういう部分は話の前提ではあると思うんですけど、補足することがあれば、事務局どうぞ。

事務局（和田学校教育課長）： スポーツ活動への参加状況につきましては、年1回調査することとしています。

宮下市長： ですから、やっぱり中身次第だと思うんです。競争だけやるから排除するっていうことだとむしろスポ少としては成り立たないと思うので、そういう自浄作用に任せてみたらいいんじゃないかと思っています。納谷委員どうぞ。

納谷委員： はい、その検討中の中にまさに川内が入っているんで、保護者の方からいろいろ話を

聞いたりしているんですけど。私が今感じているのは、学校側が保護者に向けて説明会を何回かしているんですけども、保護者の方の出席率が非常に低いんですね。保護者の方たちもスポーツ少年団に移行するというのはわかっていて、なるしかないなと思っているんですけど、自分たちがこうしていかなきゃと思っている方はごく少なくて、意識が低い。やっぱり説明会に来られる方たちは今子どもたちが部活をやっている、実際5年生とか6年生とか主でやっている親の数が多くて、32年からスポーツ少年団に完全移行となると、今の本当は小学校4年生の子が6年生になった時になるのでやっぱり学校側としても3年生とか4年生の保護者の方に説明会に来てほしいんですけども、ほとんど来ない状況でいます。この前の説明会は、私は参加できなかったんですけども、参加された方から聞いたら、学校が説明したことについて、保護者の方が、質問したことに対して、学校側はやはり教育委員会からスポ少に対してこういう説明をなさい、してください、ということで説明会を開いているので、そうすると、保護者の方がこういうのはどうかと意見を出しても、学校の方がすぐに即答できないんですね。

細かく言うと、例えば今川内は野球とミニバスケットと卓球があるんですけど、バスケットに関しては、中学校にはバスケット部がないので、中学校で終わってしまう。卓球もそうなんです。今まで中学校の方にバスケットを作りたいとずっと出されてはいるんですけど、子どもの数とか先生の数とかでどうしても新しい部活を作れないという現状があるので、そしたらバスケットをこのまま続けていくのではなくて、違うスポーツに変えてもいいんじゃないかという議論に学校側の方に要望を出しても、学校側の方ですぐ返答できない、言葉を濁したとか、保護者が納得できるような返答をしてくれなかったというのを保護者の方から聞いたりしたので。学校側としてもちゃんとスポ少に対して親に強く説明できないというのを先生か

らもお聞きしてたので。やっぱり説明会をやってもうまくできていないというのを実際私も感じています。今この32年度までの一年半の間に新しくスポ少を作るのでここできちんと基礎を固めてもらいたいんですけども、保護者の方も、意識が低くて、学校側もどうしていいか、試行錯誤しながらやっている状態なので、説明する側はやっぱりしっかりとしたものを作ってから説明していただきたいというのがすごくあります。保護者にわかるように説明してもらいたいです。中身がわかっている方が説明するのと全く知らない方が話を聞くのでは全然違うと思うので。そこはやっぱり保護者側に立って説明をしていただきたいとか。あんまり学校と保護者がうまく成り立っていないです。

宮下市長： おそらく、今の話を聞いていると、若干思ったのは、学校側に答えがない場合というのは必ずあって、親は何百人といて、それぞれの個別の思いで学校側に交渉する、と。そうすると、その中で答えが出ないものというのが学校側にあるというのは理解していただけますよね。まずそれが大前提で、もしかして今のケースはそれにあたるのかもしれない。もう一つは学校側の問題として、明確に答えがないというより、そもそも答えがないものもたくさんあって、バスケを中学校でやらせてくれても、それはある意味個別の親の相談であって、そんなことできないなという話がかもしたらあるのかもしれない。だからそこは正直申し上げて、親・保護者と学校のコミュニケーションをどうとるかという問題のような気がするんですよ。

ただ、大きな指摘の一つとして、我々自身が、大きな方針を説明できていないということが、もしあればそれは問題あると思いますけれども、今決まっている大きな方針というのは少なくとも小学校の部活動は廃止します、と。それ以外の、その次どうするかという話については、学校で考えて下さいというのは基本ですよ。学

校単位で考えて下さいというのが基本になっているからそのコミュニケーションの中で議論していただくというのが大前提になっていると思います。だからどうしてもバスケをやらせたいという親御さんがいたとしたら、その仲間を探して要望するなり、学校側と協議をする、チャレンジするというのが正しいと思うのですが、どうでしょうか。そういうイメージでいいですか。

納谷委員： スポーツ少年団を今から川内で作るにあたって、学校の説明の仕方だと思うんですけど、どういう形のスポーツ少年団を作るのか明確に保護者の方にわかりやすく説明がなされていない。保護者としてはやはり指導者のこととか、子どもたちがこれからそのまま続けていけるのかどうかとか親の負担はどうかとかそういうところを大前提で聞いてしまうので、そこをちゃんと学校側の方で説明していただきたいというか。

事務局（中居総括主幹）： 6月に川内小学校の説明会と部活指導者の代表者の会議に出席させていただきました。その際に、代表者の方々が話し合い、まずは9月に運営者の組織を作り、その後で指導者を探してみるということになりました。具体的に、どの部だったら指導者が見つかるかもしれないなど、様々な意見が出されておりました。9月に保護者会を開いたときには、あまり人が集まらなかったこと、そして、11月に再び会議を開く予定であることは、学校から聞いております。一方で、部活動を小中学校で同じようにしてほしいという要望は、川内地区だけでなく、以前から他の地域でもあり、スポ少への移行ではなく、部活としてもあった問題です。ただ、6月の会議では、そのような話題は全く出ていませんでした。このことは、まずは川内小学校と川内中学校とで相談していただくことだと考えております。その上で、連絡協議会として、もちろん相談に応じていき

いと思っております。

宮下市長： よろしいですか。私からは何点かあって、1つはやはり保護者の方々のご意見というのはよく聞いてほしい。学校主体と言っていますけれども、やはりその部分もあるんですけど、全体の話なので、教育委員会が主体でやってほしい部分と、市民スポーツ課、市長部局とうまく連携してやっていただきたいと。そのことを常にお願いをしております。特に他はございません。教育長もそういう感じによろしいですか。

氏家教育長： はい。

宮下市長： はい、ありがとうございます。そうしたら、3と4はこれはある意味その反対がないというか、基本的にはしっかり進めて下さいという問題ですので、まとめて議論したいと思えます。3と4についてそれぞれ説明をお願いします。

事務局： そうすれば、資料は7ページになります。まずは3番「夢を育む教育」のところの「キャリア教育の講演会」の説明となります。

事務局（中居総括主幹）： キャリア教育講演会について説明させていただきます。

児童生徒に夢や希望を育むために、今年度から実施しているキャリア教育講演会は、児童生徒のアンケートで、4段階評価のA評価80%をめざしております。現在、6校で実施しており、予定している9校が終了する11月にアンケートを集計する予定です。

例えばJAXAの講演会では、「宇宙に行くことは大変なことだとわかり、驚いた。もっと知りたい。」「将来の夢が変わった。これからの勉強につながると思った。」

アナウンサーの講演会では、「プロがやっていることはすごいと思った。失敗を恐れず挑戦し、今後の生活に生かすことが大切だと思

た。」「人生は直線ではなく遠回りだという言葉が心に残った。遠回りでも目標を果たせるようにがんばっていきたい。たくさんの努力をしなければならぬことがわかった。」などの感想が寄せられています。

また、参観した保護者のアンケートには、「講演を聞いた日に、子供が家で宇宙の図鑑を見て、宇宙飛行士ってすごいね！と話していた」というようなことが記されており、講演会を通じて知的好奇心が高まるだけでなく、家庭で話すことで、キャリア教育に関する保護者の啓発にもつながっているようです。

夢や希望を育むことは、学習意欲の向上にもつながるため、アンケートの数値だけでなく、子ども達の感想の内容からも講演会を評価し、改善していきたいと考えています。

来年度の講師の選定につきましては、今年度通り、むつ下北、または青森県に関係する方を中心にする予定です。さらに、来年度は希望する職種等を学校から募集し、キャリア教育講演会の趣旨に合う講師を検討することで、より広く学校の要望に応えられるようにしたいと考えております。

今年度は、各学校への希望調査を4月に行い7校を決定したあと、5月に追加募集を行い2校を追加しました。来年度は各学校が次年度の教育課程を編成する2月までに希望調査を行うことを計画しています。そして、今年度の開催回数を参考に8校程度を予定しておりますが、予算の許す限り、より多くの希望校で行えるよう調整したいと考えております。

今後の課題は、これまで以上に、「児童生徒が夢や希望を持ち、目標に向かって努力する態度を養う」という講演会の趣旨を実現していくことです。今年度は、教育委員会が講師のスライドを作成して公演前に紹介することで、講演内容がより理解しやすいようにしてきましたが、来年度は、講演を聞いた体験を今後の事後指導に効果的に生かせるよう、講演内容と各教科等との関連資料を配付することを検討しています。

そして、学校で学んでいることが将来の自己実現につながることを、子ども達が実感できるようにしていきたいと考えております。以上です。

宮下市長： はい、ありがとうございます。そうしましたらジオパークも続けて説明をお願いします。

事務局（石川主任指導主事）： ジオパークに関する教育活動について説明させていただきます。まず、33年度の目標値となるKPIは、児童生徒の30%がジオパーク体験活動に参加するとしております。

この目標値は、小学校は4～6年生、中学校は1～3年生において、ジオパーク体験活動を推進し、小・中学校それぞれ3年間の中で一度は体験活動を行えるように想定しているためです。

現在の進捗状況についてですが、小学校13校全てで450名、中学校6校で241名、併せて対象児童生徒の25%にあたる691名の児童生徒が本事業の補助を受けてジオサイトを訪問しており、KPI目標値にはまだ至っておりません。

昨年度は、訪問するジオサイトが学校行事と関連した下北自然の家付近のちぢり浜や釜臥山に集中しておりましたが、今年度は、ちぢり浜は昨年度の8校から2校と減少し、学校行事に関連した釜臥山は1校のみで、他に、水源地公園や恐山、脇野沢のイルカウォッチングなど、学校独自の計画や工夫のもと、様々なジオサイトを訪問しております。一例として、大湊小学校の6年生は、芦崎での清掃や北の防人大湊ジュニアガイドツアーを行い、その様子が報道されておりました。

また、本事業に申請していない中学校3校も、事前学習の一貫としてジオパーク推進課の出前講座を受けたり、県民局や下北ジオパーク協議会の事業を活用したりしており、小・中学校全22校がジオパーク体験活動に取り組んでおります。

更に、体験活動の後には、学んだことや感じたこと等を個人や班でレポートにまとめたり、発表したりという事後学習にも取り組み、12月に行われる下北ジオパーク学習発表会では、小学校2校に加え、中学校1校も発表する予定です。中間報告の資料は4校となっていました。訂正させていただきます。

このように、体験だけでなく、事前及び事後学習によってより深く学ぶ機会としている点が今年度の大きな特長であると考えております。

今後は、これまで各校で工夫してきた取組を踏まえた上で、引き続き、各校への情報提供や教員研修の機会を確保するなどし、社会や理科など教科をまたがった視点での児童生徒の資質能力の育成に結び付けていければと考えております。以上となります。

宮下市長： はい、ありがとうございます。ちょっと時間も押しているので、こちらの2点については特にご意見のある方がいらっしゃればお伺いします。

田中委員： キャリア教育は私はすごく大賛成で、この今の5月～11月までのメンバー、どの方もお話を聞いてみたいなあ。いい人選だと思うんです。例えばJAXAの職員の講演を大湊小学校でやって何学年をやられるのかわからないんですけども、私も小学校で講話をしますが、小学校1年生から6年生相手に同じ話ではできないので、できれば同じ学年でとお願いするんです。これが1年生から6年生まで全員聞いているのか、ある学年だけなのかかわからないんですけど、1年生から6年生までを対象に1回にやっているんですか。

事務局（中居総括主幹）： JAXAは、大湊小学校では全校を対象に行いました。すごく上手で、1年生も6年生も大喜びでした。

田中委員： 学年によっては話が難しくなったりと

かするのではないかなと思うんですが、例えば5年生だったら5年生、6年生だったら6年生の全部の地区をインターネットでつないでWEB配信できますよね。そういうことで、全部まわることにはできないわけですから、私はそういうことがあってもいいと思います。ライブ配信をして、話を聞かせてあげるキャリア教育があってもいいと思う。どっかの学校で実際にやっているんだけど、それを撮ってそのままライブ配信できるはずなのでそれを我々の業界もやっているんで、できないはずは多分ないと思います。

村中委員： 私もそういう風に思いました。1校だけに聞かせるのはもったいないな、と。著作権とかなければ、それを画像にとっておいて、見たい子どもに貸出して、自宅に持って行って、というのがあっても対応できるような資料として残せればすごくいいんじゃないかと思ったんです。

田中委員： ライブの方が直接伝わるのかな、と。

村中委員： そうですね、ライブの方が・・・

宮下市長： はい、議長の許可を得て発言してください。と、言ってみただけですが。

村中委員： すいません。そういった資料化なんかを考えてみたらいいと思います。

ジオパークについても一言よろしいですか。ジオパーク検定というのはあるんですか。

宮下市長： 検定っていうのはまだやってないです。下北検定ならあります。

村中委員： ジオパーク検定というものもあつたらいいんじゃないかと思います。というのは、ジオパークを維持するには市民とか子どもたちの教育をしっかりやりなさいっていうのがありましたよね。前に「けんみんショー」とかいう番組

を見ていたら、ある県が子どもたち全員に県の
 いろんな人物だとか名所を盛り込んだかるたを
 全部覚えさせて、そうすると誰に聞いても、す
 らすらっとどの子どもも答えるわけです。あれ
 を見て感動しましたね。そうするとジオパーク
 の大事なエッセンスを検定で、かるたでもなん
 でもいいので、各学校の子どもたちに覚えさせ
 て、時々ちゃんとわかっていますか、という風
 にして、このことを聞かれたらすぐ答えるぐら
 いのそういうことをしてもいいんじゃないかと。
 それが市の検定に先立ってもいいのかどうかわ
 かりませんが。

宮下市長： やっぱそういう意味ではかるたや検
 定がどうかっていうのもそうなんですけど、ミ
 ニマムエッセンスというか、下北ジオパークを
 学習した、例えば5年生なら知っていなければ
 ならないことは何かということはやっぱ考え
 ていかなければならないですね。それは教育委
 員会というより、ジオパークの部局の方に伝え
 させていただきます。そのほかございますか。
 よろしいですか。

ジオパークのところで申し上げたいのは、各
 学校発信するというをやっぱよく考えて
 ほしいなと思っています。主体的な学びとい
 うことで総合学習の一環でジオパークやってもら
 ってますけど、やっていろんな発表会して、振
 り返り学習みたいなのをして、今度また学習発
 表会もありますけど。それどこの学校が出るか
 私は聞いてないですけど。やっぱ発信して新
 聞に取り上げられるとか、というところで子
 どもたちが認められたと思うので、そういう枠組
 みを作ってほしいんですね。やっぱそのサイ
 クルがどうできるかってことはすごく大事な
 ので。苫生小学校なんかいい例だと思うんです
 けど。ただやったっていうよりも何かに認めら
 れたというのはすごく大事だと思うので、発信力
 というところをやってほしい。これは決して義
 務ではないです。やれるところがやってほしい
 し、これをうまく私が次の認定に使おうとか思

ってるわけではありませし、だから独自に発
 想として持ってやっていただきたいなとお願い
 を申し上げたいと思っております。そのほかよ
 りしいですか。

宮浦委員： はい。今のキャリア教育とジオパーク
 について。

私、先々週、大畑中学校の文化祭に行って、
 これってきちんと努力しているんだなというの
 を確認してまいりました。個人新聞というのを
 作ってまして、生徒全員がキャリア教育で感
 じたこと、いろいろ職場体験したことの作文を
 一生懸命書いてました。ジオパークも事前に勉
 強して、行って感動したことを新聞の文章にし
 て、それが1つのきちんとまとまった、個人の
 レベルはそれぞれあるんですけども、それを
 新聞にして皆さんに見せている。みんな頑張っ
 ているんだなと、キャリア教育やジオパークを
 推し進めているのは子どもたちの力にきちん
 となっているんだな、と喜ばしい現状だと思っ
 て見てまいりました。以上です。

宮下市長： はい、ありがとうございます。そう
 しましたら、時間も迫ってきているので、とい
 うか超過しておりますので、今回の総合教育会
 議としては以上とさせていただきたいと思いま
 す。以上をもちまして議事を終了させていただ
 きたいと思えます。

事務局： みなさん、長時間ありがとうございます
 した。本日の会議内容についてですが、この後、
 要点をまとめた上、むつ市ホームページにおい
 て掲示し、公表となりますこと、この場でご報
 告させていただきます。

最後にその他となりますが、事務局から今後
 の予定をお話させていただきます。本日、中間
 報告をさせていただいた訳ですが、本年度の最
 終報告がまとまりましたら、総合教育会議の場
 においてご報告させていただきたいと考えてお
 ります。日程につきましては、皆様とご相談し

ながら決定してまいりたいと考えております。

それでは、以上をもちまして第9回むつ市総合教育会議を閉会いたします。

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございました。